

神社本庁のホームページ（左記）より

<http://www.jinjahoncho.or.jp/izanai/>

神道への誘い

街中の赤い鳥居、田んぼの中のこんもりした森、山の頂の小さな社、全国至るところに神社があります。

神社のある風景、それは映画やドラマでもおなじみの、ごく身近な、しかし日本にしか見られない独特の風景です。

このような神社を中心とした、日本の神々への信仰が神道です。

神道は、日本人の暮らしの中から生まれた信仰といえます。

遠い昔、私たちの祖先は、稲作をはじめとした農耕や漁撈などを通じて、自然との関わりの中で生活を営んできました。

自然の力は、人間に恵みを与える一方、猛威もふるいます。

人々は、そんな自然現象に神々の働きを感じました。

また、自然の中で連続と続く生命の尊さを実感し、あらゆるものを生みなす生命力も神々の働きとして捉えたのです。

そして、清浄な山や岩、木や滝などの自然物を神宿るものとしてまつりました。

やがて、まつりの場所には建物が建てられ、神社が誕生したのです。

このように、日本列島の各地で発生した神々への信仰は、大和朝廷による国土統一にともない、形を整えてゆきました。

そして、6世紀に仏教が伝来した際、この日本固有の信仰は、仏教に対して神道という言葉で表わされるようになりました。

神道の神々は、海の神、山の神、風の神のような自然物や自然現象を司る神々、衣食住や生業を司る神々、国土開拓の神々などで、その数の多さから八百万の神々といわれます。

さらに、国家や郷土のために尽くした偉人や、子孫の行く末を見守る祖先の御霊も、神として祀られました。

奈良時代にできた『古事記』『日本書紀』には、多くの神々の系譜や物語が収められています。

神道の信仰が形となったものが祭りです。

祭りは、稲作を中心に暮らしを営んできた日本の姿を反映し、春には豊作を、夏には風雨の害が少ないことを祈り、秋には収穫を感謝するものなどがあり、地域をあげて行われます。

祭りの日は、神社での神事に加えて神輿や山車が繰り出し、たくさんの人で賑わいます。

神道の祭りを行うのは、神社だけではありません。

皇室では、天皇陛下が国家・国民の安寧と世界の平和を祈るお祭りを行われています。

また、家庭では、神棚の前で家の安全、家族の無事を祈ります。これも小さな祭りといえます。

神道しんとうのもつ理念には、古代から培つちかわれてきた日本人の叡智えいちや価値観が生きています。

それは、鎮守ちんじゆの森に代表される自然を守り、自然と人間とがともに生きてゆくこと、祭りを通じて地域社会の和を保ち、一体感を高めてゆくこと、子孫の繁栄を願い、家庭から地域、さらには皇室をいただく日本という国の限りない発展を祈ることなどです。

このような理念が、神々への信仰と一体となって神道しんとうが形づくられています。

また、神道しんとうには、神々をまつる環境として、清浄せいじようを尊とうじぶという特徴があります。

神社は常に清らかさが保たれ、祭りに参加する人たちは必ず心身を清めます。

これら神道しんとうの理念や特徴は、日本人の生き方に深く影響しているといえるでしょう。

神道しんとうは、日本の民族宗教といわれ、日本人の暮らしにとけ込んでいます。

たとえば、初詣はつもうでや厄除やくよけ、初宮参りはつみやまゐりや七五三、結婚式や地鎮祭じちんさいなど、神道しんとうの行事は日常生活のいたるところに見かけることができます。

しかし、一般の日本人は、あまりにも身近なせいか、神道しんとうについて知らないことが多いのも事実でしょう。